中部学院大学・中部学院大学短期大学部　研究紀要第22号（2021）21－33

研究論文

建学の精神に関する大学間連携による共同実践研究（第二報）
―インクルージョンと多様性を尊重する人材育成に向けて―

Practical Research about the Commonality of Founding Spirit at Hokuriku Gakuin University and Chubu Gakuin University (Second report)
― For Developing Human Resources in which Inclusion and Diversity are Respected ―

別府悦子[1)]・中島賢介[2)]・高木総平[3)]・大井佳子[2)]
矢澤励太[2)]・Dalrymple規子[4)]
Etsuko BEPPU, Kensuke NAKAJIMA, Sohei TAKAKI, Yoshiko OOI,
Reita YAZAWA, and Noriko DALRYMPLE

抄録：本研究は、北陸学院大学・同短期大学部と中部学院大学・同短期大学部との間で、2017年９月に締結された連携協定に基づき、継続して行ってきた共同研究の一環である。ここでは建学の精神に関する研究の第二報として、両大学の建学の精神の特徴と共通性を探り、チャペル活動や講義、学生支援活動、それらを評価する「PROG」テストの中でのキリスト教的人間観を問う取り組みについて報告した。さらに、両大学の保育や幼児教育の専門家の人材育成の中で、どのような視点が求められるかについて、実践事例を通して明らかにした。その結果、両大学の建学の精神の底流にある、弱き小さな者への理解と隣人愛、そしてインクルージョン、多様性を重要視することが指摘された。そして、根本に神の前に対等平等であることから、自分や他者に謙虚に向き合う姿勢が重要であると示唆された。

キーワード：建学の精神、キリスト教的人間観、インクルージョン、多様性、「PROG」テスト

Ⅰ．両大学の研究連携の経緯と研究目的

１．共同研究の経緯と意義

本論文は、北陸学院大学・同短期大学部と中部学院大学・同短期大学部との間で、2017年９月に締結された連携協定に基づき、継続して行ってきた共同研究の一環である。

二つの大学は「神を畏れることは知識のはじめである/主を畏れることは知恵の初め」というキリスト教主義の建学精神を定め、地域に根差した教育研究活動や人材育成に努めている。北陸学院大学・同短期大学部（以下、北陸学院と記す）では、「神を畏れる心を育て、他者も自分も社会をも大切に築き上げていく『本当の知恵を持つ人物』の育成」が目指されている。

また、中部学院大学・同短期大学部（以下、中部学院と記す）は、「その教育理念は人格教育の実現を目指すか、同じく人格として創造された他の人間との共同関係において、キリスト教精神による『愛と奉仕』を尊重する」としている。

「神（主）を畏れること」とは、愛と義と公平を求める神の意志を尊重することであり、そこよりはじまる「知識」は、技術的知性だけではなく、それを真に生かす叡知的理性をさす。またそれは、隣人愛に生きることを促し、正義、自由、平和を祈り求める「知識」および「本当の知恵」のことであり、両大学ともその精神を尊重している。

両大学は保育士と教員の養成学科、および附属や併設の幼稚園、保育所、児童館および小学校や高等学校を擁し、人材育成にかかわってきた。また、それぞれの地域の保育・幼児教育、学校教育等にかかわり地域貢献活動を進めてきた。地域の特色や歴史は異なっても、子どもたちや生徒、利用者に障がいや家庭の事情がある場合においても、それぞれの場で排除されることなく過ごせるよう、隣人愛、愛と奉仕を尊重した養成と支援を目指してきた。

ところで、今、保育・幼児・学校教育現場には様々な

１）教育学部子ども教育学科　２）北陸学院大学人間総合学部　３）人間福祉学部人間福祉学科
４）短期大学部幼児教育学科

事情を抱えた子どもたちが在籍し、一人一人のニーズに応える取り組みが必要になってきている。それを後押しするものが「インクルージョン」の国際的な流れである。保育や教育において、どのような背景や事情をもつ子ども、そしてどの学生にも、一人一人に「愛と義と公平」が与えられることが求められているのである。このような中で、専門職を輩出する学生育成やキャリア教育においては、両大学の建学の精神を礎にした人間教育を行うことの必要性がますます高まっていると言える。

両大学はこうした共有する建学の精神や理念を礎に、次の２点から共同研究の課題を定め、実施してきた。一つは、チャペル活動をはじめとした宗教活動を通し、学生育成の充実を図るための共同研究である（高木・楠本・志村、2018）。もう一つは、多様性を尊重したインクルーシブ保育・教育についての共同研究である（別府・大井他、2020、平野・谷他、2020、ダーリンプル・中島他、2020）。

こうした学生育成やインクルーシブ保育・教育を推進する共同研究を行うことで、両大学の教育や地域貢献活動のさらなる向上を図り、地域における大学の社会的任務を遂行していくための一助とすることが本共同研究の意義である。

（別府）

２．建学の精神に関する共同研究の経緯と成果

前項に記されているように2018年に高木・楠本・志村によって、北陸学院と中部学院との共同研究がまとめられた。その研究のプロセスにおいては、共同実践研究会が実施されたが、その中で改めて両大学の建学の精神を振り返り、その具現化としてのチャペル活動を互いに知ることにより、共通点とそれぞれの特性からの学びを得ることができた。

その研究成果の一端として、高木・楠本・志村（2018）では、チャペルに関して次のことが確認された。例えばキリスト教教育の歴史では北陸学院は、中部学院の倍以上の長さを持っており、特に示唆を受けたのは、キリスト教教育とキャリア教育、講義等との関係を関連づけて模索することの重要性である。つまり、これは、キリスト教教育と学生教育、地域貢献、社会貢献を関連づけることを追求するということにもなる。

ことに印象に残ったのが、両大学のキリスト教教育を概観できる表（高木・楠本・志村、2018、pp.146～148.）に基づいて行われた対談（北陸学院楠本史郎理事長・学院長・学長《当時》、中部学院高木総平宗教主事、同志村真宗教主事）における、以下の北陸学院の楠本理事長の言葉である。

「チャペルを中心としたキリスト教教育の目的は『多様性を担保するもの』である。すなわちチャペルでは通常の世界とは異なった価値観が提示される。また、聖書の読みとは疑問を呼び起こすものであり、何かを思い込ませるのではなく問いかけである。そのためには『語る自由』、批判精神が宿るものでありたい。」

これを受け、第三筆者の高木は心から同意してこう述べた。「一般的には、キリスト教教育というと、狭い枠組みを押し付けると思い込んでいる人もいるが、建前とは裏腹に多様性が軽視されているこの時代、この社会にあって、『建学の精神』を根底に置く、キリスト教教育が果たす責任は大である」というように、この共同研究によって示唆を受けた。

この共同実践研究会の中で多様性を重視することが強調されたのである。そして、それはまさしく子どもや障がい者などの社会的弱者に対しての命や尊厳をどのように守っていくかということであり、人類の多様性の尊重につながっている。

（高木）

３．インクルーシブ保育・教育に関する共同研究の経緯と成果

2019年度、インクルーシブ保育・教育の大学間連携共同研究は、合宿を含めて研究メンバーでインクルーシブ概念について討議し、事例の読み取りを行って共通認識を形成してきた。その成果は「中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要」第21号の３つの論文（別府・大井・水野・谷・ダーリンプル・平野・山田・斉藤・西垣、2020：以下第１論文と記す、平野・谷・大井・別府・水野・ダーリンプル・西垣、2020：第2論文、ダーリンプル・中島・大井・別府・志村・谷、2020：第３論文）、としてまとめられた。３つの論文はいずれも事例からの検討である。それはインクルーシブの理念の実現に向かう保育・教育研究には、実践者が自らに問い自らで見出す過程が必須であると考えたからであった。

インクルージョンは1994年のサラマンカ宣言以降の国際的潮流である。インテグレーション（統合）からインクルージョン（包摂）へと転換する法整備がなされ言葉の置き換えは進んできたが、保育・教育の現場においてその内実が展開するには具体的な視点と方法が必要である。そうした問題意識の上に、共同研究は多様な事例検討を試みた。第1論文の事例からは、長いスパンで子どもの姿の変化を捉え子ども理解を深めることが重要であるが、そうした実践であっても、保育者は特別な支援が必要な子どもに対してクラス集団への参加を目標にすることを当り前としていることがあり、十分なインクルージョンになっているかは検討する必要があることが示された。また、第２論文の事例からは、子ども同士では「ナチュラルサポート」による対話的な関係があるのに対して、加配保育士という個別に対応する保育者は、ややもすると特別な支援を必要とする子どもと対等に「対話的な関係」を結ぶことができにくい場合も生じること

から、統合からインクルーシブへの展開、即ち、子どもの異なる、多様な学びのニーズに応える上での課題が呈示された。第３論文においては、インクルーシブ保育・教育の理念が、両大学が目指すキリスト教保育・教育の理念と合致するものであることの検証が試みられ、非キリスト教園を含む保育と小学校のエピソードから「子どものありのままの姿を受け止める」ことが重要であるという視点が抽出された。そして、インクルーシブ保育・教育に取り組む保育者・教師の語りからは、キリスト教主義の保育園や幼稚園であってもそうでなくとも、キリスト教的人間観に通底する人間理解が見出された。尊厳を有する一人の人間として子どもを捉えることを明確にしてインクルーシブ保育・教育がより広く実現されるために、キリスト教保育・教育が果たせる役割があると考察された。

この３論文においてはインクルーシブ保育・教育の理念を探る中での実践上の課題が事例を通した共同研究によって確かめられた。

（大井・別府）

４．本研究の目的と方法

このように、数年にわたって、宗教主事を中心にした建学の精神やチャペル等の宗教活動における共同研究、インクルーシブ保育・教育を実践事例から検討した大学間連携共同研究を実施してきた。今回はそこで得られた研究成果をもとに、両大学が現在まで行ってきた活動や実践の相互交流を行う。その際、共同研究の中での課題であった、建学の精神が諸活動とどのように有機的連携が図られているか。そして、それらが学生や実践者にどのように浸透しているか。さらに、実践の視点としての重要な一つである、インクルージョンと多様性がどのように尊重されているかについて分析していくことを主眼に置く。これを通して、現代の大学に求められている、時代の要請に即した保育や教育の専門性と教養をもった学生を輩出するための支援と地域貢献を向上させていく課題を追究することを、目的としている。

具体的な目的は次の３点である。

①建学の精神を礎にした両大学におけるキリスト教諸活動と教育、学生育成や支援との関係を相互交流し、教育や諸活動の成果について考察する。

②親や保育者・教師がキリスト教人間観によって、子どもに何を見るか、子どもの育ちをどのように支えるかを、実践事例を通して検討し、人材育成や教育の視点を探る。

③①、②の結果をふまえ、建学の精神が両大学でどのようにキリスト教諸活動と教育、諸活動に位置づき、有機的連携を図られているかを考察し、今後の共同研究の課題を提示する。

（別府・大井）

Ⅱ．建学の精神とキリスト教活動や教育への具現化

１．中部学院における建学の精神について

すでに高木・楠本・志村（2018）において整理したが、ここで、改めて中部学院大学の建学の精神の理念、沿革を確認することとする。

建学の精神制定の経緯の概略は以下のとおりである。「本学院がキリスト教学校として再出発した1947年以降、教育の基としていくつかの聖書章句が用いられていた。済美高等学校の建物の礎石に刻まれている聖句がそのことを伝えている。一番古い1957年の礎石には『神を畏るるは知識の基なり』（箴言１：７）と刻まれている。さらに、1962年『真理は汝らに自由を得さすべし』（ヨハネ８：32）、1966年『あなたの若い日にあなたの造り主を覚えなさい』（伝道の書12：１）とある。これらを選んだのは片桐孝先生で、様々な機会にこれらの聖句が用いられた。1969年ころ、それらの聖句のうち、箴言１章７節を『建学の聖句』とすることとなった。ところが1987年に出版された『新共同訳』では、『主を畏れることは知恵の初め』と以前の翻訳が変更された。そこで、聖書の翻訳が変わる度に学院の「建学の精神」の文言が変更されることのないよう、1997年10月に学院長確定として現在のものを恒久的な『建学の精神』とした」（岐阜済美学院、2014）

高木・楠本・志村（2018）では、それぞれの建学の精神の理念と沿革に触れた後、建学の精神の具現化としてチャペルの報告、振り返りをまとめたが、ここでは、今回の共同研究のテーマに関連した中部学院の建学の精神への理解をまず述べる。

本学院の歩みや建学の精神の解説が記されている『知識のはじめ』から紹介する。まず、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」の聖句（ヨハネ3：16）に示されているように、神は、愛の神である。それに対する応答として、「神を敬い、神を愛する」ことになり、「神を愛し、人を愛せよ」（マルコ12：28～33）がイエスの最重要の教えだということになる。この「人を愛せよ」が本研究で取り上げられるインクルーシブ保育・教育を考える根本の教えであると言える。続いて、この「人を愛せよ」はイエスの言葉では「隣人を自分のように愛しなさい」でありその根拠として、「わたしたち人間が一人残らず、神から造られた、いわば『神の子』だから」と記されている。また神に造られたとは、「神にかたどって」（創世記1：27）ということであり、これはすべての人に与えられている尊厳を有する人格を表し、具体的には王も奴隷も等しい、と述べられている。換言すると、すべての人間が「神の姿」だと認めることが「隣人を愛する」ことになり、そのことが聖書の根本精神だと結ばれている。今回の共同研究に関しては、障がい者も健常者も子どもも大人も等しいということであ

り、聖書の根本精神がそこに明確に表れている。

この『知識のはじめ』では、「神を畏れる」ことは「自然を大切にすること」、「神と人のことばを大切にする」、「ことばを大切に」とは「嘘をつかない」ということと続いている。

そして最後に、「神を敬い人を愛する者は謙虚となる」と締め括られている。ここでは神が嫌われる人間の問題性は「嘘」とともに挙げられていたのが「傲慢」とまず述べ、「謙虚」は、神と人を敬い愛する者の大切な姿勢だと指摘し、神によって造られ、愛されていることを知ることから出てくるとある。この傲慢さが、障がいや病を負っている人、「弱い」人を見下し、差別する元凶であると考えられ、また持っている者が持たない者への一方的な支援などに「傲慢」が隠れていることが往々に見受けられる。神の前の「謙虚」な姿勢が、建学の精神と深く結びついていることをここで確認することができる。

（高木）

２．中部学院における建学の精神の具現化

（１）チャペル活動

では、このような建学の精神がどのように具現化されているのであろうか。ここでは、チャペル活動と講義をもとに考えてみたい。

チャペル活動では、実際にどのようなことが伝えられているだろうか。これを検討するため、中部学院における一昨年度、昨年度のチャペルを振り返ることにする。中部学院では毎月曜日岐阜県関市の関キャンパスで、毎木曜日、関と各務原の両キャンパスでチャペル活動を行っている。そこでは宗教主事、クリスチャン教職員、がスピーチを担当し、近隣の牧師にも依頼している。一昨年度は89回、昨年度は88回の開催であった。

ここでは、スピーチを担当した人たちがどのような聖句を用いたかを確認することによってその内容の特徴を探ることにした。担当者によっては。聖書に直接触れることがない場合もあるが、選ばれた聖句はスピーチの話と関係があると判断し、それぞれのスピーカーの意図がそこに表れていると考える。ここでは、その聖句からどのような方向性で話されたかをまとめてみる。聖句であるので明確にテーマを分けることができない個所が多々あるので、線引きは難しいが、次のように分類してみた。①神（キリスト）の前にどう生きるか　②神（キリスト）による守り、支え　③人と人とのつながりについて　④社会の片隅に追いやられた人たち（障がい者、病人など）のこと　⑤神（キリスト）について（これら以外もあり、ここでは省略）であった。

すると次のように分類することができた。①2018年度42回　2019年度22回　②（以下両年度）８回　11回　③16回　14回　④12回　15回　⑤３回　９回　スピーカーがいつも「建学の精神」を意識しているわけではないだろうが、すべて建学の精神に関して上述したこと（『知識のはじめ』）に対応していることがわかる。むしろ「建学の精神」が私たちのあり方全体を包括していると言ってよい。その中でも、普段チャペルで語られるテーマの多くは、神の前、キリストの前にどう生きるか、他者との関係を尊重し、社会の片隅に追いやられている存在に目を注ぐということである。ここで改めて覚えることができており、今回の研究テーマの一つである、「インクルーシブ保育・教育」に対して、本学の建学の精神がその根底となるということは全く疑問の余地のない自明なことだといえる。

（高木）

（２）講義を通して

ここでは、建学の精神の具現化の一つとして、2018年の共同実践研究会でも課題にあげられてきた講義やそのシラバスにそのように表れているかを検討するため、二つの講義から検討することにした。「キリスト教概論」と「キリスト教保育」である。

①キリスト教概論

第三筆者の高木が担当している「キリスト教概論」は、半期の授業として、前半は旧約聖書、後半は新約聖書を取り上げている。ここでの表現に従えば、旧約聖書において、創世記の創造物語からバベルの塔の物語、アブラハムからヨセフの族長の族長物語を取り上げ、神の前にどう生きるかということを中心に話している。その後は、出エジプトに触れ、「解放や救い」を中心に話している。イエス・キリストにつながる預言者にも少し触れている。新約聖書では、クリスマス物語、病人や障がい者の癒し、罪人の赦し、子どもとイエス、「善いサマリア人」、「ザアカイ」などを取り上げ、イエスがどのような人々と深く関わったか、そのイエスを通して神の目は、社会の片隅に追いやられた人や「弱い小さな」存在に向けられていることを強く示し、私たちのあり方に問いかけている。

こうしたチャペル活動や講義がどのくらい学生の心に届いているか、試験やレポートの知識レベルでは判断できるが、生きた知恵としてはどうかの判断は難しい。北陸学院の取り組みから学びたい。

②キリスト教保育

中部学院大学短期大学部幼児教育学科は、幼稚園教諭・保育士を2年間で養成する学科である。学生たちは、幼稚園教諭・保育士資格を取得するために、文部科学省・厚生労働省が定める資格に必要な科目の単位をすべて取る必要がある。そこに、本学科では選択科目として、学生に必要な知識・能力を学ばせるための独自科目を設定しているが、その一つが、「キリスト教保育」である。キリスト教主義大学・短大として、また附属のキリスト教主義の幼稚園に幼稚園教諭を送る側としてこの科目は重要な科目と考えている。

キリスト教保育は、半期15コマの１単位の演習科目で

ある。教員は、宗教主事あるいはクリスチャンの教員である。まずは、ダーリンプルが担当していた際の教科の内容及び学生たちの学びの実際を述べたい。

講義概要は次のとおりである。

「キリスト教保育では、命を与えられて生きている私たちが、（神から）守られ支えられ愛情を受けているということを、どのように子どもたちに直接的・間接的に伝えていくか、その中で、子ども達がどのように育っていくかを具体的に学んでいく。そして、キリスト教保育を学ぶことを通して、保育の基本や原点についての理解を深めていく。子ども讃美歌に親しんだり、聖書の物語を絵本や紙芝居を通して知っていく中で、キリスト教保育をより身近なものとして捉えていく。」

具体的なシラバスは表１のとおりである。

表1　キリスト教主義保育論のシラバス

1．オリエンテーション
2．聖書の中の子ども
3．キリスト教保育を考える
4．キリスト教思想と保育者・保育者養成の関係
5．日常保育におけるキリスト教保育Ⅰ
6．日常保育におけるキリスト教保育Ⅱ
7．保育計画におけるキリスト教保育の実際Ⅰ
8．保育計画におけるキリスト教保育の実際Ⅱ
9．キリスト教保育指針における子どもの育ちⅠ
10．キリスト教保育指針における子どもの育ちⅡ
11．キリスト教保育指針における保育者の育ちⅠ
12．キリスト教保育指針における保育者の育ちⅡ
13．子ども讃美歌、聖書につながる物語の理解Ⅰ
14．子ども讃美歌、聖書につながる物語の理解Ⅱ
15．子ども讃美歌、聖書につながる物語の理解Ⅲ

学生たちは選択科目ではあったが、50人ほどが選択した。彼らの選択理由は、「自分自身が、キリスト教関係の園を出た」「キリスト教保育とは何だろうととても興味がわいたから」「宗教のあるところの保育を知りたかったから」「キリスト教のことを１年生の時に勉強したので、２年生でも学んでみたいと思ったから」「キリスト教の園に就職したいから」というのが、非常に多かった。

授業では、なぜキリスト教保育を学ぶことが大切かという問いと共に、キリスト教保育においては、「生かされているということ」「愛と平和と希望を信じること」「子どもと共に育つということ」「自分から愛することと、愛され守られていると感じながら人を愛していける感覚」について、考えていくことが大切である、ということを、実際の保育現場での朝のお祈りや讃美歌なども取り入れながら、上記のシラバスを進めていった。受講した学生たちの感想は、「目に見えないものの大切さを感じた」「『愛』という教えの下に広がるキリスト教保育は、子どもとかかわっていく私たちにとって大切な学びの一つだと思った」「キリスト教保育で学ぶことの中のほとんどが人の元になることだと思った」「『守られているんだ』と感じることは、私はクリスチャンではないのでわからないけど、少し違った意味では何となくその思いが分かる気がした」というものであった。また、具体的なお祈りや讃美歌を歌うことを体験する中で、「（子ども）礼拝の中で、神様は一人ひとりを守って下さっていることを実感した。そうやって、子ども達も神さまのことを思っているんではないかと思った」「キリスト教も仏教も内容は違うけれど、やっている流れは同じ感じだと思った」「信じる宗教は人それぞれだけど、いろんな思いが込められているんだと思った」「『神にゆだねる』ということを思うと、一人で抱え込まなくてもいいし、心にゆとりが出てくると思った」「こうやった沢山の子どもが神さまの存在を知って一人ぼっちじゃないこと、いつも誰かが見ていてくれているということが感じられるといい」「お話を聞いて、私のことも神さまは見守ってくれているのかな…と思った」「お祈りはただするのではなく、ちゃんと心からイエスさまに対してするものだと思った。見守られていることを忘れないためにも、お祈りはとても大切だと思った」という感想が出てきた。

前述の中にあった、「１年次のキリスト教の学び」とは１年次の必修で履修する必要のある「キリスト教概論」である。学生たちは、この科目を履修し、かつ、チャペルに継続して出席する中で、建学の精神を少しずつ理解していったと思われる。そしてさらに、この２年次の半期、毎週１回90分を15回継続して、保育のなかにおけるキリスト教について学んでいくことで、それがさらに身近なものになり、自分の言葉としての理解となっていったのではないだろうか。

（高木・ダーリンプル）

３．北陸学院における建学の精神について

北陸学院大学（以下、本学）が所属する学校法人北陸学院の建学の精神は、「主（神）を畏れることは知恵の初め」（詩編111編10節）である。現在の理事長・学院長の楠本は次のように述べている。

「北陸学院建学の精神」は、旧約聖書の詩編111編の「主を畏れることは知恵の初め」という言葉にあらわされる。1885年（明治18年）にメリー・ヘッセル先生によって創設されてから、継承されてきた。

「主を畏れる」とは、恵みの神を敬い、愛することです。
「知恵の初め」とは、人が真実に良く生きるための土台となるものです。

神を畏れることを知ると、謙遜にされます。すべての人が、神に造られ、愛される、かけがえのない命であることを知ります。それでこそ、知識や学問が活きたものとなります。

また、金沢女学校が設立された経緯について、『北陸学院百年史』の中で次のような記述がある。

ヘッセルは、大阪でウィンに出会ったことが縁となって、翌一八八三年（明治19）
五月、金沢に来遊し、ウィン宅に客となること五か月、その間に金沢の女子教育が放置されているのを見聞した。そこで彼女は、自身がアメリカにおいて受けた高度の女子教育を日本にもわかちたいと、かねてから望んでいた女学校設立をこの金沢で実現しようと考えるようになった。

この記述から、金沢において女子の教育が「放置」されている現状が、ヘッセルに金沢女学校（後の北陸女学校）の設立を決意させたということができる。その背景は、『北陸学院125年史』の次の記述で確認することができる。

石川県の女子学校の状況 ── 1875年に初めて設けられた女子学校（高等教育機関）「石川県女子師範学校」は受験生７名、半年後に卒業した者２名という低調さであった。当時女子に教育を受けさせる者は上流社会の'物好き' だけであった。一般的に、女子が職業人として社会に進出することは '家の恥辱' と見なされていたのである。

ヘッセルはこの地方における女性の地位の低さを痛感した。一般家庭の娘たちは '親孝行' のあまり、あしたにも「女中奉公に行く」と言うのである。そのような女子に対する教育であるから実態は全くお寒いものであった。彼女はキリストの愛を知った者として、この惨状を看過できなかった。そこに自分の '仕事の場' があることを痛感した。

こうした事情から、ヘッセルは金沢においてキリスト教教育を行う案を立てて海外伝道局とアレキサンダー宣教師に書簡を送っている。彼女はその事業を４点にまとめている。

①これはこの地方においてわれわれだけが行なえる将来性のある事業である。
②金沢の女学校の運営はマウントホリヨーク方式によって行えばうまくいく。
③この事業のためにミッションが要求する資金はごく少額です。生徒は寮費と授業料とを支払う。将来性があり経済的に困っている生徒のために奨学金制度を設ける。
④この女学校開設のために共に祈っていただければ、この事業は実現し、主の栄光がもっともよく表されると思う。

（中島）

４．北陸学院における大学教育への具現化

第二筆者の中島は全国のキリスト教大学においてそれぞれの建学の精神がどのように具現化されているか、また具現化にはどのような課題があるかを分析した上で、建学の精神の段階的な具現化を主張したが、その中でもキリスト教教育と他の活動との有機的なつながりが求められていることを指摘した（中島、2020）。

その建学の精神が現在においても大学教育の中で具現化されている例の一つとして、大学における奨学金制度が挙げられる。両親が死去、離婚あるいは別居などの諸事情によって児童養護施設等に入所している者を対象に、「児童養護施設等奨学生」として、授業料、施設設備費を半額とする制度を採用してきた。一昨年度には、児童養護施設等奨学生が働きながら学生生活を続けて無事卒業したことが新聞記事にも取り上げられている。もう一つは両親の離婚などによって家計が困窮している家庭を対象に、「一人親家庭等奨学生」として、授業料の半額とする制度を採用している。他にも兄弟姉妹減免制度など、さまざまな事情で就学が困難である学生に対して機会を与えるべく経済支援を行っている。

また、学生委員会とは別個に学生特別支援委員会を設けて、学生個々の状況に応じて本学がいかなる支援ができるかということの検討を重ねてきた。例えば、聴覚に障がいのある学生の要望に応じてノートテイクのボランティアを募ったり、てんかんの症状が見られる学生については全教員に対してその対応法などを周知したりするなどの支援活動を実施してきた。2011年度から幼児児童教育学科において、独自科目として「発達支援論」（現在の特別支援教育論）が一年生必修科目として設置されている。保育者・教師に向かうには、さまざまな状況にある子どもの発達をどのように支援していくのかという視点が必要であるという認識によるものであった。2012年度自閉症スペクトラムなどの発達障害を持つ学生を受け入れたことを機に、本学では自閉症スペクトラム支援体制の構築に着手している。具体的には本学社会学科教員を中心にした「自閉症スペクトラム研究会」を発足させ、学生理解のみならず支援体制に関する協議を行った。また、地域支援活動として地域教育開発センター（REDeC）の活動の一環として、生活の場での遊びで自己発揮しにくい子どものための「あそび場 JOJO」、保育者が担当する子どもについての理解を深め合う場としての「MAGONOTE 塾」などを設けて支援活動を継続してきた。

こうしたインクルーシブな視点での教育が実践されてきたのは、何が神のみ旨にかなうかを問い続ける建学の

精神が根底にあったことは言うまでもない。

（中島）

5．北陸学院におけるPROGテストによる「見える化」— キリスト教教育における人間観習得、その可視化の試み —

北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部（以下「本学」）においてはこの数年、基本方針のさらなる明確化と強化に向けて努力が傾注されてきた。３つのポリシー（「アドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）」、「カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）」、「ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与についての方針）」を整え、どのような学生の入学を期待し、どのような教育課程をもって教育研究活動を展開し、どのような卒業生を社会に送り出したいと願っているのか、ビジョンを研ぎ澄ます営為を重ねてきた。こうしたプロセスの中で、「ディプロマ・ポリシー」の冒頭で次の目標が掲げられることとなった。「キリスト教的人間観を理解し生涯にわたって、自分に与えられた使命（Mission）を発見し、実現しようとする力が身についている」。

卒業生に期待される姿として、「キリスト教的人間観」を理解し、生涯にわたり自分の「使命」について問い、これを探究しながら歩む姿勢が形づくられることを明示したわけである。他のポリシー同様、ディプロマ・ポリシーで規定される内容も可視化され、検証可能なものとされる必要がある。学生が本学での学修過程を通じてそのような変化成長を遂げ、どのような力を身につけて卒業していったのか、本学の教育カリキュラムがどのくらい実効性をもって機能したのかを検討し、評価改善を加えつつ、つねに前進成長する教育機関であることを願い、目指している。

そこでこの「キリスト教的人間観」についても、大学での４年間、短大での２年間の学びと生活を通じ、どのような力がどのくらい身についたのかを可視化する試みが企てられた。2020年度より本学では、学校法人河合塾と株式会社リアセックが共同で開発し実施している「PROG」（Progress Report on Generic Skills）を採用している。これは「社会人基礎力」とも呼ばれる「汎用的能力＝ジェネリックスキル」の定着度を可視化し、教育成果の検証を可能にするためのテストである。「リテラシーテスト」と「コンピテンシーテスト」の２種類のテストがあり、客観的指標に基づいた力の測定を行い、学生への効果的な支援を可能にする（註１）。この「PROG」テストにおいては、実施する学校の特色に応じて、独自の設問を設け、テストで測定された学生の基礎力との関連性を分析することも可能となっている。ここでは、学年を経るごとに学生がキリスト教的人間観を身につけているかを経年比較すること（通時的研究）を目的とし、建学の精神に基づく教育効果と結び付けていこうとするものである。

そこで本学ではこの独自設問において建学の精神である「主を畏れることは知恵の初め」を「キリスト教的人間観」として具体的に展開した設問を検討し、表２に示した10の問にまとめた。

表2：「PROGにおける「キリスト教的人間観」に関連する本学の独自設問

問１	自分が神と人に愛され、喜ばれる、個性ある大切な存在だと思いますか。
問２	タラントンが与えられていることを大学（短大）での学びを通して発見し、磨き伸ばそうと思いますか。
問３	タラントンを使い、人や社会、神のために果たす、何らかの使命が、自分にはあると思いますか。
問４	他者もまた、神と人に愛され、喜ばれる個性ある大切な存在だと思いますか。
問５	個性を認めることができ、その意見を真剣に聴こうと思いますか。
問６	人の考えを聴きながら、自分の考えも伝え、一致して協力したいと思いますか。
問７	社会や世界の矛盾や課題を、大学での学びを活かして客観的に見つめ、原因を知ろうという関心がありますか。
問８	矛盾や課題を解決し、使命を実現するために、大学（短大）での学びを活かし、目標や方法を考え、計画を立てようと思いますか。
問９	人の意見を受け入れて、みんなで課題を解決したいと思いますか。
問10	どんな問題にぶつかっても、必ず解決できると信じ、粘り強く方法を求め、計画を柔軟に変えて課題を解決していけると思いますか。

これらの問いについて、現時点での自分がどれだけそう思うかを巡って学生に回答をしてもらった結果を、リアセックにて集計分析した報告を受ける機会を得た。まだ最初のアンケート実施結果を得た段階ではあるが、それでもこのアンケート結果と特にコンピテンシー（経験を積むことで身につく行動特性であり、社会におけるどんな仕事にも応用可能な基礎力）との相関関係が強く看取される。たとえば「自分が神と人に愛され、喜ばれる、個性ある大切な存在だと思」える力は「自信創出力」に、「人の考えを聴きながら、自分の考えも伝え、一致して協力したいと思う」力は、「協働力」に、それぞれ強い結びつきがみられることが分かってきた。「社会や世界の矛盾や課題を、大学での学びを活かして客観的に見つめ、原因を知ろうという関心」は「課題発見力」に、「どんな問題にぶつかっても、必ず解決できると信じ、粘り強く方法を求め、計画を柔軟に変えて課題を解決していける」と思う力は「協働力」、「統率力」、「自信創出力」、「行動持続力」と関連している可能性が高い（註２）。

2020年度の本学における「PROG」テストの受験結果からはこうしたことが分かってきている。

キリスト教教育において、その育成の実りを客観的指標を用いて評価検討するという試みには抵抗を感じることもあり得るだろう。「神の人造り」の業は人知を超えた営みである。学生が卒業後に何年も経ってから、在学中には思いもよらなかった変貌を遂げているということも起こり得る。在学中には理解していなかったキリスト教信仰や人間観、価値観の重大さに卒業してから初めて気づかされるということも起こり得るであろう。信仰は、「見えるものではなく、見えないものに目を注」ぐ（コリント二４：18）ことである。こうした目に見えない聖霊の働きに開かれていることがキリスト教教育の営みを根本において支えている。

しかしそれと同時に、この聖霊はその御業の遂行にあたり、「神の協力者」（コリント一３：９）としての人間を用いられる霊なる神でもある。そうであるなら、人間が参与するキリスト教教育の業において、それがどのような実りを生んでいるのか、どれだけ神の御業に仕えることができているのか、どうすれば「神の協働者」としてよりよい働きをすることができるのかを問い、吟味し、改善と進歩を志すこともまた、聖霊の働きの内にあると言えるのではないだろうか。使徒パウロは聖霊が結ぶ実は「愛」、「喜び」、「平和」、「寛容」、「親切」、「善意」、「誠実」、「柔和」、「節制」であると語っている（ガラテヤ５：22-23）。目に見えるもの、可視化されるものがすべてではない。しかし在学中という時間の推移の中で、学生が本学のキリスト教教育を通して何を受け止め、何に思いを巡らし、どのような変化と成長を経験したのか、その目に見える部分を意識し見つめようとすることには相応の意義があるはずである。

両大学の共同研究のもう一つの柱である「インクルーシブを担う保育者・教師」については、キリスト教的人間観すべてがインクルーシブにつながるが、特に問４・問５・問６が密接に関連する。問４の「他者もまた」は「どのような子どももまた」と置き換えられ、「自分（たち）と違うからこそ互いに尊重すべき」という視点となる。問５では「障がい」という言葉が「個性」の一つであるとされる時、必要以上に特別視・特別扱いすることはなくなるだろう。そして、互いに違うからこそできることがあり、そのできることに向けて協力していくことが問６となる。

在学中にディプロマ・ポリシーで目指されている卒業生の姿に向けて、何がどの程度達成されたのかを把握し、さらなる教育の向上に資するものとしながら成長し続ける教育共同体の形成が求められる。その意味でこの試みは学生の評価に勝って、第一義的には教育機関としての本学の自己吟味と継続的成長に資するものと考えている。その努力がまた学生の学びへと還元されていくであろう。本学において「PROG」テストを活用しつつ、この試みを推進していく、そのスタートラインに北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部は立っている。

（矢澤・中島）

Ⅲ．実践事例を通してみる人材育成の課題

前項では、それぞれの大学の建学の精神が、キリスト教活動や学生教育にどのように具現化しているかを検討してきた。それでは、実際の実践を行う人材育成を考えた際、こうした視点を生かしていくにはどのような課題があるか。2019年度の共同研究（別府他2020など）において、事例検討が重要であったと先述したが、今回も一つの実践事例を通して検討を行う。

子どもの行動に何を見るか―今日的課題としての捉え

尊厳を有する者として子どもを、全ての子どもを見ているか、保育者・教師は日々の子どもへの対応において自らの人間観を問われる。「みんなと一緒」が暗黙の了解となってきた日本の保育・教育において、子どもを巡る大人たちに、「何を見るか」と問いかける子どもの存在がある。本節では、その例としてＡ君の姿への大人の思いから考察する。キリスト教小学校１年生のＡ君の母親（母と記す）から「とんでもない」と感じるＡ君の姿について相談が寄せられた。担任教師（Ｂ先生と記す）はその姿に容認的で褒めることさえあるという。母とＢ先生は共にキリスト教養成校で学びキリスト教保育の経験があり、率直な対話が可能な関係にあったことで見方の違いの照合がなされていた。お二人の協力を得てＡ君の姿に対する見方の違いを整理し、「子どもを見る」ことについて考察する。

（１）子どもの姿の見方から自分自身を知る

Ａ君の姿について母とＢ先生の捉え方が異なった例の一つが学習ドリルの使い方であった。ドリルは授業中にも宿題としても用いられているが、Ａ君はまだ「習っていない」ページであっても記入する。Ａ君の使い方を母は「ダメでしょ」と思い、Ｂ先生は「いいんじゃない」と思う。Ｂ先生の対応を見て、母はドリルについて「教師が進める授業と連動する」ものであって「教師の指示に従って用いる」べきで「みんなと一緒にする」と自分が考えていることに気付いたという。Ｂ先生には母の反応は新鮮で、自身のドリルの使い方について自問し、「授業で指定したところはする。いつどこでしても構わない」という自分の基準に気付いている。Ｂ先生は「基準」の背景に何人かのクラスの子どもたちの姿があることに思い至る。授業中のドリルの課題に「今はしない、家でやる」と言い張るＣ君がいる。家ですると親に悪態をつきながらの作業になることを知るＢ先生は「家で文句言いながらするのはだめだから、それなら休み時間にしてしまえば？」と声をかける。ドリルの内容よりも、

Ｃ君が家での自分の姿に気付いたり、したくない気持ちに自分なりの折り合いの付け方を見出すことがＣ君の学びの課題だからである。一方、Ａ君は興味こそが学びの原動力であると感じさせる子どもで、Ａ君のものごとへの熱中ぶりはクラスの子どもたちが興味を広げる契機となっている。自分の興味でＡ君がドリルを活用することは当然のこととＢ先生には思われる。

二人の見方の違いから、母は自分が「先生」と「みんな」を基準にＡ君の行動を見ていることに気付き驚く。校区の小学校での体験入学で、「先生」「みんな」を基準に行動が規制される生活が予想されてＡ君には合わないと私立学校への就学を決めたのであった。「それができるようにこの学校を選んだ」はずであったにも拘わらず、母自身が「先生」「みんな」を基準にしている。Ａ君は帰宅後もずっと戦（いくさ）ごっこの話をし、学校生活が楽しくて仕方がない様子である。園生活では他児の名前をほとんど知らずに過ごしたＡ君であるが戦ごっこを通じてクラスの多くの子どもの名前を発している。戦ごっこはＡ君を含む歴史好きの二人が始めた遊びである。休み時間には校庭に続く林でクラスの半数が参加して遊ぶ。参加メンバーの間でイメージする戦の時代が同じでないことが判明して時代について話し合いがなされたり、「砦」についての疑問から教師が６年生の社会科教科書を提供して「長篠合戦図屏風」の写真をみんなで取り囲んだりしている。砦に必要な大量の棒の調達のために不要な筆記用具をクラスで集めている。

常に新しいアイデアが出され、することがたくさんある毎日にＡ君は夢中なのである。しかし、Ａ君の授業中の姿は、常に机の上に教科書ではない本を数冊積み、興味ある授業では集中しすぎるくらい集中するが、机の本を拡げていることも多い。母には学んでいないように見える心配な姿となる。Ａ君は、国語の「漢字の成り立ち」で物の形に由来する漢字に興味を持つと、小さな文字で由来が示される漢字をドリルにみつけ嬉々としてノートをつくったり、家で身の周りの物を絵に描いて形を変形させ「テレビ」や「ネコ」というオリジナルの漢字を創作したりする。このようなＡ君の姿から文字のおもしろさに魅かれる子どもがおり、Ｂ先生はＡ君の興味に応える教材研究を余儀なくされ、Ａ君の興味がクラスの子どもたちの学びを深める方向に授業をつくることとなっている。

母の心配はプリントのＡ君の回答によるところが大きい。足し算と引き算の混合問題の答えには全部「？」が記入されていたり、「おむすびころりん」のプリントの空欄には、本文から言葉を抜き出し「（　　）をひろげて」に『つつみ』と記すべきであるのに挿絵を見て『ささ（笹）』と記しているからである。プリントは正解があることを前提に作成されているので、正解でないと「理解していない」と見える。しかし、今、注目され、子どもたちに求められるようになってきた学力は、正解という見方のない学びの力である。平成29・30年の学習指導要領改訂は幼児教育から高校までの育成されるべき資質・能力を「知識・技能」「思考力・判断力等」「学びに向かう力・人間性等」の３つの柱として示している。

Ｂ先生はプリントではなく、遊びや生活を含む姿からＡ君の学びと課題を捉える。Ａ君は、林でみつけたヘビの抜け殻の取り合いで友達に噛みついたことがある。しかし、Ａ君は噛んでないと言い張る。Ｂ先生はＡ君と話しながら「そうか。両手はヘビの皮をもつのに使っている。相手に取られないように、かつ、壊れないように持っていなければいけない。その状況で、相手の手を離させようとすると使えるのは口だったということか！」と気付いたという。だから、Ａ君の噛まないという主張を否定することなく、噛んだことを責めない。「手が使えないから口を使ったんだね。でも、相手は痛かったんだから謝った方がいいよ」と伝えるが、Ａ君は、ゴメンというのは「わざと」やった時に言う言葉で、わざとではない時に言うのはおかしいと主張する。このようにＡ君には日常生活で使われる言葉の意味が周りと同じでないことがある。おそらく、母がプリントからＡ君が「理解できていない」と評価することになるのも、Ａ君と周りで言葉の意味が「異なる」ことに因ると考えられる。「異なる」ことは、両者の関係にあることであって一方にその責任を負わせるものではないと、インクルーシブの理念は謳う。Ａ君のみが修正を求められるべきではないということである。異なる者の間にどのように相互理解をつくっていくかの計画が保育者・教師に求められる。当該児の個別支援計画とクラスの指導計画の両方においての課題となる。

（２）キリスト教保育・教育における一人一人の子ども

Ａ君の母とＢ先生に、自身の子どもの見方はキリスト教とどのようにつながっていると思うかと問うてみた。母は、「キリスト教保育の保育者として、子どもを『賜物』と見る。なのに、親としては・・・」と、保育者としての見方と親としての見方に乖離があることを挙げる。Ｂ先生は、自身が学び実践してきた幼児教育の見方の土壌にキリスト教の人間観があることに加えて、「この学校の成り立ちが、私たち教師の子どもを見る見方を文化として支えているような気がする」と述べる。明治前期開設のキリスト教学校は、当時一人前の人間と見做されていなかった幼児と女性のために開かれた（前掲）。当時、社会的に弱い人たちに注がれていたキリスト教の眼差しは、随時新しく加わる教師たちに学校文化の底流として引き継がれて今につながり、「外れる」ことへの許容度を高くし、教師の取り組みや教育活動にも高い自由度を提供していると感じると言う。

キリスト教を自分の軸に置く者は、自らの行動を、「人に喜ばれる」ではなく、「神に喜ばれる」を視点として問われる。「人に喜ばれる」という視点は、「自分が人か

ら喜ばれたい」という自分の思いから始まる。「人から喜ばれるように」が行動の基準になると、その前提に「みんなは同じことを喜ぶ」を想定することとなり、周囲と同じように振舞わなければならないという同調圧力の形成に加わっていくこととなる。保育・教育の場では、その空気に耐えられない子どもがおり、不登校によって自分を守ろうとしたり、いじめの加害者や黙認者となって同調していることをアピールしたりする。周りから「こだわり」と捉えられる自分らしさを持つ子どもたちは、同調圧力によって自分らしさを封印する方向へと進ませられ、自分自身を生かすことができないままに自分は価値のない者と感じるようになる。

キリスト教における「みんなが違ってみんないい」という見方は、神が一人一人を異なる存在としてお創りになったことによる。「人に喜ばれる」に対して「神に喜ばれる」とは「神の愛に応える」ということである。神（イエス）は人に報いを求めない。だからこそ、一人一人が、神の「無償の愛」に「どう応えるか」を求められている。

マタイによる福音書25章14節から30節におけるタラントンのたとえをＡ君やＣ君の例で表現すると、ドリルを自分から（必要以上に）取り組んで成果を上げる（５や２タラントンもうけた人）、ドリルに自分から（与えられた範囲で）取り組んで成果を上げる（自ら銀行に預けるなどの努力をした人）、ドリルをしようとしない（家でやると親に悪態をつく）Ｃ君には、教師が「学校でもできるよ」とアドバイスをして「地面に埋める行為」を回避させた、と考えることができる。このように考えると、Ａ君は主体的に自分らしくドリルに取り組むという世界との関わりをしており、「外れる」ことが問題となる根拠はどこにもないことになる。

このように「外れる」が問題視されることのない学校生活が続くことで、子どもたちは同調圧力とは全く別の次元で自分を生かすことができるようになると考えられる。それぞれのこだわりを個性として自分自身で大切にしようとし、相手のこだわりも個性として大切にしようとするだろう。Ａ君が机に本を積み、自分の実験や調べもののために教室に自分のコーナーを設けてもクラスの子どもたちは真似ることがない。Ｂ先生は、周りの子どもたちが真似たりしないから安心してＡ君の行動を許容できると感じている。子どもたちがそれぞれに生かされていると感じているということだと考えられる。

学校を「離れる」ことを行動で主張する子どももいる。教師が同伴して共に「冒険」の時間を過ごしていると子どもが「そろそろ皆心配しているから帰ろう」と言う。教師がよく言う「みんなが心配しているから」という同調を求める「みんな」ではないと考える。「あなたの存在を必要としている場に戻りなさい」と言う声を子どもはどこかに聞くのだろう。このような子どもの姿に、次の聖句が重なる。

イエスに触れていただくために、人々が子どもたちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。イエスはこれを見て憤り、弟子たちに言われた。
「子どもたちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。子どものように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」そして、子どもたちを抱き寄せ、手を置いて祝福された。（マルコによる福音書10章13節から16節まで）

親や教師はつい、聖書にある弟子たちの視点で考え子どもを叱る。大切な視点は別にある。このように大人たちが子どもを見、子どもと対話するならば、子どもは、「なぜ生きているのか」ではなく、「なぜ生かされているのか」を小さな頃から感じ取り、その人その人にある「使命」を自分に問うという在り方に向かうだろう。通常、自分の夢や希望を叶えるということが進路指導とされるが、自分の使命はどこにあるのかを子どもと共に考え、子どもが決めるのを援けるのがキリスト教学校の進路指導となる。子どもの将来のために、という親の思いと対峙する時、子どもに何を見るかという視点を再度思い起こしたい。

Ａ君の母親と教師は、Ａ君の行動を通じて、自分の思いと向き合い、互いと出会う機会を得た。キリスト教保育・教育は、親として、教師として、それぞれに子どもと誠実に向かおうとする者が集う場であるはずである。相手や「みんな」に忖度するのではなく、子どもと大人も、大人同士も、そして子ども同士もが、互いに異なる者として出会い、新たな発見を生む場となることが期待される。

（大井・中島）

Ⅳ．研究の総括と今後の課題

今回の共同実践研究は、数年間両大学で行ってきたそれぞれのグループの共同研究を一つにまとめ、あらためて両大学の共通の理念である建学の精神について検討を図ることが目的であった。

まず、両大学の建学の精神を振り返ると、それぞれに、女性や子どもたち、あるいは障がいのある人たちなど、社会の片隅に追いやられたり、「弱い小さな」存在への理解や私たちの在り方を問うてきたことが確かめられた。建学の精神の中で語られる「人を愛せよ」とは、イエスの言葉では「隣人を自分のように愛しなさい」、つまり、隣人愛のことであり、このことが建学の精神の中での根幹であることが示唆された。しかし、隣人愛の意味を考えた時、それは、「持っている者が持たない者への一方的な支援」をすることでない。そこに「傲慢」が隠れていることに気づく必要がある。神の前の「謙虚」な姿勢こそが必要であると強調された。

そして、中部学院のチャペル活動では、こうした神の前、キリストの前にどう生きるか、他者との関係を尊重し、社会の片隅に追いやられている存在に目を注ぎ、謙虚な姿勢で相互の理解を深めることがテーマの中心であることが指摘された。また諸講義の中で、「人の心の痛みが分かる教員・保育者」、「一人一人の価値観の相違を認められる心をもった教員・保育者」の養成が目指され、シラバスにも掲げられていた。

この「弱い小さな」存在への尊厳を尊重していき、多様性を重視する人材育成が北陸学院で目指されている。こうしたインクルーシブな視点での教育が実践されてきたのは、何が神のみ旨にかなうかを問い続ける北陸学院の建学の精神を根底にしている。そして、卒業生に期待される姿として、「キリスト教的人間観」を理解し、生涯にわたり自分の「使命」について問い、これを探究しながら歩む姿勢が形づくられることを明示している。そして、学生支援の諸活動や「PROG」テストにおいて、「キリスト教的人間観」に関連する独自設問を設定し、振り返るとともに、可視化が図られてきた。これまでキリスト教的人間観に関する研究は、文献学的研究が主であり、それが具体的に数値をもって語られることはほとんどなかった。しかし、研究にさまざまなエビデンスが必要とされている昨今、キリスト教教育においても何らかの指標を示す必要があるのではないか、ではどのような指標が考えられるかということで「PROG」を採用したというのがこれまでの経緯である。今回の論文では、試み的な取り組みの紹介を行ったが、今後仮説を検証していくような共同研究を進めることが課題である。

このように両大学において建学の精神を振り返り、具現化してきた諸活動を検討する中で、高木は多様性の理解が重要であり、「インクルーシブ保育・教育に対して、建学の精神がその根底となるということは全く疑問の余地のない自明なことだ」と述べ、二つ目の共同研究課題と深く関わりのあることが呈示された。

実践事例からは、尊厳を有する者として子どもを、全ての子どもを見ていく上で、保育者・教師は日々の子どもへの対応において自らの人間観を問われることの重要性が指摘された。そして、キリスト教保育・教育の場が、相手や「みんな」に忖度するのではなく、子どもと大人も、大人同士も、そして子ども同士もが、互いに異なる者として出会い、新たな発見を生む場となることで、こうした保育や教育が可能となることが提起された。「寄り添う」「子ども目線で」等の言葉で、保育における子どもを見る見方について語られることは多くあるが、実際に子どもの姿に何を見たかを持ち寄ること、異なる目を持ち寄ることによって、「子どもを見る」ことが深まる。そして、この作業は、自分の見方や、自分自身についての気付きや発見をもたらすものともなる。

昨年度の共同研究の中で、インクルーシブ理念の実現には保育者・教師が自分自身をみつめることが求められ、その困難な努力を引き受けるには、異なる者を我と共に生きる者として感じることが必要であり、その感覚を支えるものとして、神の前に対等な存在として人があるというキリスト教の人間観が有用であることが示唆されたが、本研究の実践事例においてもその点が明確になった。

すべての人に与えられている尊厳を有する人格を表し、すべての人間が「神の姿」だと認めることが「隣人を愛する」ことになり、多様性の尊重にもなる。そのことが聖書の根本精神でもあり、建学の精神でもある。障がい者も健常者も子どもも大人も等しいということであり、傲慢でなく、謙虚な姿勢が求められるのである。こうした社会的弱者の視点にたち、インクルーシブな視点での保育や教育が実践され、そしてそれを担う専門職を養成していくためには、「建学の精神」の根底にある隣人愛や多様性の尊重が重要であるといえ、その一助としてチャペル活動や講義、および学生支援等の活動を有機的に連関させ、それを可視化していくことが重要なのではないか、ということが二つの研究において改めて示唆された。

現在、子どもの権利条約や障害者権利条約などの国際条約の後押しを受けて、どんなに障がいが重くとも、どんな事情をもっていても、一人一人のニーズ（多様性）に応え、インクルージョンを進めるという流れがある。しかし、一方で、現在になってもなお弱者差別や蔑視の風潮がなくなったかといえばそうではなく、経済的困窮や家族の病気など、不利な状況が重なると子どもや当事者、家族が責められ、窮地に立たされることは否めない。経済競争や格差拡大が激化し、社会的に弱い立場に立つ人たちに対する風当たりも強くなっている。強い個性や障害特性から起因するミスなどによって、保育や学校現場、職場、地域から排除される現状やそれによって生じたいじめや自殺などの深刻な事件も後を絶たない。さらに、現在、新型コロナウィルス感染症の感染拡大によって、子どもから高齢者まで全世界の人が命と健康の危機にさらされている状況にあるが、その中でも子どもたちや障がい児者、その家族が苦境に立たされている。

このような状況下で、大学、短期大学においても学生をはじめ、関係者が問題に向き合う根底として、隣人愛や正義や平和を重んじることがますます重要であり、この研究において改めて建学の精神の底流にある理念の重要性が示唆された。大学、短期大学において、こうした視点に立った教育や地域貢献を向上させることがますます求められているといえよう。

本研究において、インクルーシブ理念とキリスト教人間観の重要性が、別々に進められてきた二つの共同研究の中で出逢い、確認することができた。そして、今回は俯瞰できるよう材料を提示するにとどまったが、それぞれの章で提案されていることの間には、つながることで新たな展開を生むと考えられることが散見される。今後

の共同研究において、これをさらに進展させていくことが課題である。

（別府・大井）

（付記）すでにこの大学間連携研究については、両大学の研究倫理委員会で申請を行い、承諾が得られているが、本研究では、事例の扱いについて、北陸学院大学・同短期大学の倫理委員会に申請を行い、承諾が得られた（番号：2020-7）。また、2020年度中部学院大学・同短期大学部特別研究費の助成を受けている。

（謝辞）本研究の実施、発表にあたっては、北陸学院大学 楠本史郎学長、中部学院大学短期大学部 片桐多恵子学長、中部学院大学 北川博司氏、元中部学院大学 志村真宗教主事より貴重なご指導、ご教示をいただきました。記して感謝いたします。

【註】

[1]「PROG」テストについて詳細は以下を参照のこと。https://www.riasec.co.jp/prog_hp/（2020年11月２日アクセス）株式会社リアセック「PROG アンケート（キリスト教的人間観）分析報告書 ― 学生アンケートと基礎力の関連分析 ―」（2020年７月10日）。

[2] 近藤勝彦、キリスト教の世界政策現代文明におけるキリスト教の責任と役割、教文館、180頁、2007.
※聖書引用は聖書協会共同訳に拠った。

【文献】

別府悦子・大井佳子・水野友有・谷昌代・ダーリンブル規子・平野華織・山田丈美・齊藤英俊・西垣吉之、統合保育からインクルーシブ保育への展開のための実践的視点－大学間連携共同研究(1)－．中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要21、1-12. 2020.

ダーリンプル規子・中島賢介・大井佳子・別府悦子・志村真・谷昌代、インクルーシブ保育・教育をキリスト教保育・教育の視点から考える－大学間連携共同研究(3)－．中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要21、23-31. 2020.

岐阜済美学院、知識のはじめ－わたしたちの済美学院－、2014.

平野華織・谷昌代・大井佳子・別府悦子・水野友有・ダーリンブル規子・西垣吉之、インクルーシブ保育・教育を担う加配保育者のあり方－大学間連携共同研究(2)－．中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要21、13-21. 2020.

中島賢介、キリスト教大学における建学の精神に関する研究．北陸学院大学北陸学院大学短期大学部研究紀要．1-8. 2020.

高木総平・楠本史郎・志村真、「建学の精神」に関する大学間連携による共同実践研究（第一報）－その具現化としてのチャペル活動－、中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究第４巻．2018.

Practical Research about the Commonality of Founding Spirit at Hokuriku Gakuin University and Chubu Gakuin University (Second report) — For Developing Human Resources in which Inclusion and Diversity are Respected —

Etsuko BEPPU, Kensuke NAKAJIMA, Sohei TAKAKI, Yoshiko OOI, Reita YAZAWA, and Noriko DALRYMPLE

Abstract : This study is part of continuing joint research based on the cooperation agreement between Hokuriku Gakuin University & College and Chubu Gakuin University & College of November 2017. We explored the characteristics and the commonality in the founding spirit of both universities. This is the second report about their founding spirit. We also described chapel activities, lectures related to Christianity, support for students and an initiative examining the "PROG" Test (including an item of Christian Humanity). Moreover, we clarified what kinds of viewpoints are important in terms of developing human resources for early childhood education and childcare by examining practical cases. The results showed that both universities emphasize understanding "one of the least of these brothers of mine" (Matthew 25:40), "love your neighbor" (Matthew 22:39), inclusion and diversity, which are based on the founding spirit of both universities. It suggests that it is important to humbly face yourself and others because we are equal before God.

Keywords : founding spirit, Christian Humanity, inclusion, diversity, "PROG" Test